

① サルさんと キツネさんと タヌキさん

むかし、むかし、どうんと　むかし。とても　なかのよい　サルさんと　キツネさんと　タヌキさんが　すんでいました。

秋あきになって　あちらの里さと　こちらの里で、秋まつりの　たいこや　ふえのねが、かぜにのって　この　あたりにも　きこえてきます。
サルさんと　キツネさんと　タヌキさんは、もう、がまんのでき
ないほど　うれしい　きぶんじゆうがつじゆうよっかになって、十月十四日のおまつ
りが、はやく　こないかと　ゆびおり　かぞえて　まちこがれてい
ました。

やっと、十四日の おまつりの 日ひが きました。キツネさんと
タヌキさんは、あさはやくから ごちそうを たべ、うつくしい
べべを きて はしゃいでいます。そして、サルさんをむかえに
いきました。サルさんも ねんごろに おけしように しています。
そこで、山やまの 上うえにある おみやさんへ さきに いてもらうこ
とに しました。

おみやさんに ちかづくに したがって たいこや ふえの ね
が、だんだん 大おおきく ひびいてきます。キツネさんも タヌキサ
んも 山やまの 上うえの おみやさんへ おおいそぎに いそぎました。
おみやさんでは、大きな クマさんが、カちからづよく たいこを た
たいて いました。キジさんは、おどるように ふえを ふいてい
ました。みんな にこにこして おまつりをいわっています。キツ



ネさんも タヌキさんも とても
うれしくなりました。おみやのみ
せで おかしや あめを かって
いるうちに、おまつりの おもち
まきの ギョウジが はじまりま
した。けれども、まだ、サルさん
が きません。キツネさんも タ
ヌキさんも どうしたのだらうと
きがきでは ありません。
いよいよ おもちまきが はじ
まりました。キツネさんも タヌ
キさんも いっしょうけんめい



ひろいました。二人^{ふたり} あわせて 九^{ここの}
つも ひろいました。

さて、おもちを わけることにな
りました。キツネさんが、すぐさま、
「タヌキさんは、四^{よっ}つ。わたしは五^{いっ}
つ。」

と、いいました。タヌキさんは これ
はおかしいと おもって、

「わたしが 五つ。キツネさんは 四
つ。」

と、いいかえしました。二人は だん
だん けんかごしに なってきまし

た。そんなとき うつくしく きかざった サルさんが、ハアハア
いきを はずませながら やってきました。おもちまきが、お
わっているのに きがついて とても がっかりしました。
ふと なにも いわない 二人に きづいて たずねました。

「どうしたの。」

キツネさんが すばやく

「タヌキさんが よくばりなのよ。」
と、いいました。

かんかんに おこった タヌキさんは、

「キツネさんが ずるいのよ。」
と、どなりました。

サルさんは、二人を

「まあ、まあ、おちついて。」

と、いって なだめてから、ちよつと かんがえて、

「タヌキさんは 三つ^{みっ}。

キツネさんも 三つ。

わたしも 三つ。」

と、いいながら おもちを わけました。

「これで みんな おなじね。」

とも、いいました。

おみやの かえりみち、サルさんは なんだか わるいような とく



をしたような きぶんになりました。

キツネさんと タヌキさんは、なにか へんだなあと おもい、
おまつりの たのしい きぶんは いつか なくなっていました。

それから、しばらくして サルさんは、キツネさんと タヌキさ
んの 家いえに いきました。また、おかしのように なかよく なり
ました。